ふゆのうた（FA/RE）

omotenac

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふゆのうた（ＦＡ／ＲＥ）

【Ｎコード】
Ｎ０５４５Ｎ

【作者名】
ｏｍｏｔｅｎａｃ

【あらすじ】
ロイエド／原作ベース／らぶらぶのつもり

いっそ雪になればいいのに。
エドワードは恨めしげに冷たい冬の空を見上げた。
雨は勢いを弱める様子もなく、冷たい雨粒をエドワードの頬に打ち付けていく。いつもより一層冷たく感じる水滴に濡れないよう体を引くが、背後には大勢の人が押し寄せているためあまり内側へと戻ることはできなかった。
ふわふわ舞い落ちる粉雪なら楽しい。今年はまだ雪を見ていないから、司令部までの十五分ほどの道のりだって遠く感じないはずだ。
けれど今しがたようやくイーストシティの駅に到着したエドワードとアルフォンスを出迎えてくれたのは、雪にもなろうとしてなりきれない、中途半端な霙雨。
普通の雨より重たいそれを浴びながら徒歩、というのは辛いし、少し贅沢だけどタクシーを、と思っても、子供と鎧という奇妙な組み合わせは乗車拒否されることが多かった。
容姿に対する不信感に加え、アルフォンスの鎧が車内を汚すのではないかと運転手たちは心配するらしい。

「ねえ、兄さんだけでもタクシーで行かない？」

どうしたものか、と悩むエドワードの思考を読み取ったかのようなタイミングで上から声がかかる。
見上げた先にある鉄の兜に表情はないが、その穏やかな声や仕草に弟の表情を思い描くことは簡単だった。

「僕は雨が弱くなるまで雨宿りするからさ」

弟はいつも優しい。僕は後からいけばいいからね、と荷物をとり

あげようとする。いつもはあまり無駄遣いしないようにと言うけれど、今日はエドワードの体を気遣っているのだ。
　エドワードの右腕と左足は、失った生身を補うために機械鎧という特殊な義肢を装着してある。
その機械と生身の境は深い傷跡と一緒で、湿気が多い日や雨の日にはひどく痛むのだ。骨の中からじわじわ染み出すような鈍い痛みは不快で、場合によってはベッドに潜って一日寝ているようなことさえあった。
二人で旅暮らしを続けるアルフォンスはいつもエドワードの身の回りの世話を焼いていて、そんな苦痛を声に出さずとも知っているから気を使うのだ。
ただえさえ体を辛くさせる悪条件が今日は二つ同時。
できることならすぐにでも宿をとって休みたいけれど、今日はその痛みをこらえてでも優先したい大事な用事がある。

『随分待たせたが』

　昨日、イーストシティに行くからと報告の電話をかけた相手、この街に住む上司は、いつもの妙に自信たっぷりの声で告げたのだ。

『君が探していたドクター＝ルイスの手記が手に入ったよ』

　錬金術という特殊な学問を学ぶ人間にとっては垂涎ものの希少な文献だ。一刻でも早く読みたい。
だから無理して早くおきだして始発の列車で駆けつけてきたというのに、目前になってこれだから困る。

「……やっぱ、走って」

　いこうか。そう提案するはずだった語尾は、けれどアルフォンス

の驚いたような声に飲み込まれた。

「兄さん、曹長だよ」

ほら、と皮手袋を嵌めた大きな手が指す方向を見れば、手をふりながらこちらへ近寄ってくる軍服の姿は、たしかに顔見知りの軍人だった。

ケイン＝フュリー曹長。エドワードが上司と呼ぶ男の、側近の一人だ。童顔に野暮ったい黒ぶち眼鏡のせいもあってどことなく鈍くさく見えるが、盗聴や暗号解読にかけては相当のエキスパートだという。

「お疲れ様。この天気で大変だったろう？」

けれど物言いや笑顔はのんびりとした優しいもので、軍のやり手という印象は全く受けなかった。

「駅まで届け物に来てたんだ。昨日君たちの列車の時間聞いてたから乗せていければって思ってたんだけど、すぐ見つかってよかったよ」

車があるから乗ればいい、と表を指差して教えてくれる。

「曹長、車なの？」

「そう…あ、でもアルフォンス君がちょっと…」

トラックなんだ。曹長はばつの悪そうな顔をして、運転席は狭いから幌を貼った荷台に乗るしかないのだと告げた。二メートルを超す巨体では仕方のないことかもしれない。

「かまいません！兄さんだけ助手席の隙間にでも入れてもらえれば」
「…おい」
何気に失礼なことをいう弟を小突けば、曹長は楽しそうに笑った。
「じゃあ乗ってよ。車、そこだから」
改札口のすぐ前。人通りの多い場所に駐車場を確保できるのは軍事国家の特権だろうか。
国軍専用、とプレートが貼り付けられた駐車スペースは、普通ならタクシーがずらり並んでいてもおかしくない場所なのに、これから乗るらしい幌付トラックの他に車はない。
どうやら幌はしっかりした構造のようで、これならアルフォンスが余計に濡れることはないだろう。親切な曹長は、おしりが痛くならないように、と緩衝材や予備のシートを重ねて席を作ってくれた。
アルフォンスの鎧の中が空洞であることを知っている人間は本当にごくわずかで、だからこうやって普通の人間に対するべき扱いをされると、エドワードは嬉しいと同時に責めたてられるような気分を味わう。
アルフォンスの肉体喪失の原因は自分にあるのだ。
この旅も、今の暮らしも、全てはあの禁忌と呼ばれる練成に挑みさえしなければなかったはずで。
「エドワード君？」
肩を叩かれてエドワードは思わずびくり体を奮わせた。
「どうしたの。濡れてるよ」
「兄さん、早く乗りなよ」

荷台に乗り込んだアルフォンスが顔だけ出しながらいう。

「…うん」

いけない。トラックの助手席に乗り込みながら、エドワードはため息を吐いた。
重たい気持ちは白い湯気になって雨に叩き落されていく。
マイナス思考はいけないと普段から気をつけているのに、時々こうやって暗い方向へと考えが向く。
それは疲れている証拠だ。早く用事を済ませて宿をとって、今日はもう寝よう。温かいものを食べて呆れるくらいたっぷり寝れば疲れはすぐに消えてなくなる。
見知らぬ土地への旅に慣れ、危険に慣れ、疲れることにも慣れた。こんなの、大したことじゃない。体調に引きずられてちょっと弱気になっているだけだ。

「寒いだろ。今暖房入れるからね」

曹長が車のエンジンをかけた。外気の影響を受けて冷え切った車内は外と比べて濡れないだけマシ、という寒さだ。
噴出し口からわずかに感じる暖気は魅力的で、エドワードはそちらへと手を差し出す。

「あ、そうだ」

さて発車、というところで曹長が思い出したように言った。

「そこの裏にコートがあるんだ。寒いなら着るといいよ」

「ありがと」

今はとにかく体を温かくしておきたい。
エドワードは素直にそれに応じ、シートの裏の隙間に手を突っ込んだ。すぐに触れる感触を引きずり出すと、それは黒い布の塊。軍人用の外套だった。

「あれ…」

大きいそれを狭い車内で羽織るのは面倒だから、広げて膝にかけようとしたら、なにげなく掴んだ襟元の刺繍に目がとまった。
黒い布に銀色でされた縫い取りは所有者の名前だ。筆記体で施されたファーストネームもファミリーネームも間違いなく良く知った人物のもので、けれどいつだって運転手付きの高級車に乗っている男の衣類がここにあるのだろう。

「大佐のだよ」

戸惑うエドワードの真意には気付かぬまま、車を発進させながら曹長は言った。

「出掛けにあった時ね、エドワード君たち乗せてきますって言ったら貸してくれたんだ」
「…大佐が？」
なんで、そんなこと。平静を装うとしても顔が赤らむのは止めようがなかった。家族や親しい友人ならともかく、上司が部下にするにはちょっとやりすぎではないか。
そこに自分たちの秘密めいた関係を見透かされたような気がしてエドワードは自然緊張するけれど、

「いや、最初はね、君が濡れてくるだろうからって中尉が仮眠用の毛布を持たせてくれてたんだよ」

運転する曹長の声にからかいや疑いの気配はない。
「だけどあんまりいい毛布じゃないだろう？だから大佐が、自分のコートの方がいいって貸してくれたんだ」
佐官のコートはオーダーメイドの一級品だから着心地がいいらしいよ、と曹長は教えてくれる。
「着て、体冷さない方がいいよ。エドワード君」
「……うん」
アルフォンスの実体はともかく、エドワードの手足のことは有名だ。鋼という国家錬金術師の二つ名もそこから得たのだから当然のことだろうが。職業柄、手足を失った同僚の話を聴くことは多いから、そういった人々の症状や解決策を軍人たちは良く知っているのだろう。
親しい大人たちの気遣いは嬉しいような恥ずかしいような落ち着かない気持ちをエドワードに味合わせた。
大人用のロングコートだ。座っている状態でも裾は流れおちて、ブーツのくるぶしまでがすっぽりと覆われた。
もしエドワードが真っ直ぐ立てば裾は地面についてしまうかもしれない。
（……うわ）
襟を立てて肌の隙間がないように首筋を覆えば、空気が遮断されてできる温もりの中に所有者の匂いを嗅ぎ取ることができた。
あの男に包まれている、と考えればひどく恥ずかしい。布越しどころか、鍛えた生身の胸板に強く抱きしめられた晩を思い出してしま

うから。
倍も歳が離れた大人はエドワードに愛を誓い、エドワードはそれを受け入れた。大切な弟にさえ秘密のひそやかな関係が築かれてから今までの間、二人きりになれた時間というのは本当にわずかなもので、最後にその体に触れたのはもう何ヶ月前だろうか。会えない理由のほとんどは旅するエドワードの都合なのだけれど、早く逢いたい、と今更ながらに感情がこみ上げてくる。
高みを目指して歩む大人は、愛を囁いても甘やかしはしない。いつだってエドワードを見ているだけで、だけど本当にくずおれてしまいそうな時は誰よりも早く手を差し伸べて掬いあげてくれる。

『君の居場所にしてほしい』

そう囁かれたのはいつだったか。

『君が疲れてしまった時、ここで少し休んで、また旅立てばいい。そんな場所に』

そんな気障な台詞さえ嫌味にならない綺麗な笑顔。
記憶の一つ一つが鮮やかに浮き上がってくることに、ようやくエドワードは悟った。

（…優しく、してほしいんだ）

あの男に。ロイ＝マスタングに。
抱擁や囁きやくちづけの甘い時間で、疲れた心を癒して欲しいと。
無意識にそんな望みを持っていた自分に気付けばひどくいたたまれない気持ちを味わうけれど、目的地に着くまでの短いドライブの合間、明晰な頭脳にはもう、愛してくれる優しい男のことしかなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0545n/

ふゆのうた（FA/RE）

2010年10月10日20時24分発行